



工高タイムス

北海道旭川工業
高等学校新聞局
〒078-8804
北海道旭川市緑が丘
東4条1丁目1-1
発行人(局長)
佐々木 晃成
(電気科3年)

も の づ く り コンテスト

電子機械科

旋盤作業部門

「目指すは優勝」 納得のいく作品を作る

第24回ものづくりコンテスト全国大会北海道ブロック大会の旋盤作業部門が8月17～18日に苫小牧工業高校で行なわれる。出場する電子機械科の清水亮太君(3年)の大会への取り組みと意気込みを紹介する。



芯出しの作業をする清水亮太君

電子機械科の清水亮太君が苫小牧工業高校で8月17～18日に行なわれる旋盤作業部門に出場する。練習は平日週2回で大会が近くなると土日もある。練習時間は1日4時間。競技内容は用意された鉄を制限時間の2時間以内に決められた図面通りに切削する。採点基準は作品の仕上がりと工具の使い方など。安全面は減点法で評価される。

清水君は「中学生のときからものづくりが好きで出

局説

交通ルールを厳守

皆さんは自転車に乗る時、どのように安全運転を心がけているだろうか。生徒指導部長の上村健太先生によると、全校生徒635人中94%の約600人が自転車通学をしている。昨年度の報告されている事故件数は4件で大きな事故はなかったという。昨年の20件よりも大幅に減っている。今年度は事故がないように皆で気を付けよう。上村先生は「もし事故が

命を守る自転車走行を

皆さんは自転車に乗る時、どのように安全運転を心がけているだろうか。生徒指導部長の上村健太先生によると、全校生徒635人中94%の約600人が自転車通学をしている。昨年度の報告されている事故件数は4件で大きな事故はなかったという。昨年の20件よりも大幅に減っている。今年度は事故がないように皆で気を付けよう。上村先生は「もし事故が

簡易クーラーを試験運転

深刻な容量不足

今年度、窓に取り付ける簡易クーラーが道立高校や特別支援学校のすべての普通教室に設置される。旭工の今後の予定について有澤理事事務長に取材した。

簡易クーラーは、旭工の3階多目的室Bに設置されているクーラーと同じタイプのもの

全治3か月のけがで体育の実技ができなかった。局員は「改めて暗闇は危険だと

遭う。油断は禁物だ。命を守る走

仲間と支え合う ピア・サポート会長 多田圭佑君(機2)



好きな食べ物はカレー

ピア・サポート・トレーニング講座が4月22日から月曜日に行なわれている。現在は3年生4人、2年生1人、1年生2人の計7人で活動している。講座では二者択一ゲームやサイコロトークなどをしながらお互いのコミュニケーション能力を高め

合い、「仲間(ピア)」として支え合う活動をしている。ピア・サポートの資格も取得できるので、少しでも興味や関心がある人はぜひ見学に来てほしい。

去年の部活動紹介で興味を持ち、コミュニケーション能力を向上させたいと思い、入会した。以前より人と会話する時間が増えた。ピア・サポートの活動は先生方や先輩方がとても親切で活動しやすい。

会長となり、3年生が進路活動で忙しくなっても、会をうまくまとめたいけるように頑張る。

指導をしている山岸史先生は「8月の全道大会に向けていくつもの競技課題を確実にこなししている。練習で積み重ねてきたことを100%発揮できるように頑張っている。

本番当日は今までで一番良い作品を作りたい」と期待している。



クーラーについて語る有澤事務長

旭工の校舎は1983年に建てられ市内の高校でも一番古い。何度か改修しているが電気の容量はクーラーの稼働に対応できないという。

旭工は4教室で20アンペアまでしか使えない。クーラー1台につき7アンペアが必要

なので、クーラーを同時に使用できるのは4つの教室で2台までだ。電気の容量を上げる工事には多額の費用がかかるが予算はないし、今後予算がつく見通しもないという。

旭工の昨年1年間の電気代は約1105万円で、月に約92万円かかっているという。クーラーを使用する電気料金

私は4月13日に誕生日を迎えて17歳になった▼中学生までは家族に朝のうちに誕生日を祝ってもらいその日の夕食にはケーキや好きな食べ物が出ていた。高校生になってからは、お祝いの言葉はあるが夕食は普段どおりだ。中学生の時は新学期が始まってすぐにある実力テストの日と同じになる時が多かったのであまりその日が楽しみだと思っていなかった。旭工ではテストと誕生日がかぶらないのですごくうれしい▼2年生に進級して専門教科の科目が増えて勉強が難しくなっていくので部活動と両立できるように日頃から頑張っている。測

量の練習では、神楽岡公園にトラバースの測量に行くので練習の時に担当の先生に指導されたアドバースを頭に入れ水平角を測るセオドライトの調節をきちんとできるように気を付けていく▼製図では、自分は書く速度が遅いので提出期限ギリギリになってしま

うことが多い。最近作った製図はかなり遅れて、1週間ぐらい毎日放課後に残って作業を進めたがまた提出期限ギリギリになってしまった。自分は製図が苦手なので時間がかかってしまう。これからは計画的に製図に取り組み、提出期限に余裕を持ちたい。また線の濃さや太さを先生に注意されるので、そこを意識してやっていきたい▼あと1年で成人を迎えて今よりできることが増える。今から成人について色々考えたり調べたりしていきたい。(土下竹内)



ペットボトルと空き缶の洗浄を

一人ひとりが意識

ごみの分別の徹底を 食品トレーを洗おう

旭工生のごみの扱いについて「分別されていない」「ペットボトルや空き缶が洗われていない」という話を聞く。現状について環境保健部長の中澤孝弘先生、校務補の塚田修さん、美化委員会委員長の松下諒大君(土3)に取材した。

美化委員長の松下君によると、旭工生のごみの扱いについて「分別されていない」「ペットボトルや空き缶が洗われていない」という話を聞く。現状について環境保健部長の中澤孝弘先生、校務補の塚田修さん、美化委員会委員長の松下諒大君(土3)に取材した。



入れ間違えないごみ箱

建築科2年生の教室は昨年も今年もごみ箱が斜めに設置されている。クラスの美化委員と担任の先生に取材した。増田光希君は「ごみが見えやすいので、分別を間違えてもすぐに気づける」と話し「美化委員になってから学校だけではなく、町に落ちているごみも気になり拾っている」と語った。佐藤学翔君は「ごみがよく見えるので散らばることはない。教室内は清潔だ」と語った。旭工生に「自分から積極的に意識して分別するのが大切。積極的にプラスチックごみはリサイクルするので気を付けよう」と呼びかけた。担任の西川聡仁先生は「生活していく中でごみの分別は絶対に守るべき。今から皆でしっかりとやっていると語った。



「ごみの分別について語る中澤先生

トルの水洗いやラベル、ふたの分別など一人ひとりの意識がまだ低い。捨て方は個人個人が気を付けていくしかない。旭工生に「ごみの分別や捨て方は知っていて当然。もう一度ごみの捨て方を見つめ直してほしい。ごみをちゃんと捨てることは環境改善の第一歩だ」と話した。

環境保健部長の中澤先生は「旭工生の多くはごみの分別ができていないが、燃やせるごみの分別が不十分で中にプラスチックごみやアルミホイルが混ざっているときがある。ほとんどのペットボトルはラベルをはがして洗われているが、洗い残しが気になることがある」と話した。



購買の児玉さん

生徒の笑顔が好き おすすめは焼きそばパン

販売をする児玉千代江さん(左)

生徒玄関近くにある購買では、約20種類のパンや4種類のおにぎり、シャープペンシルやルースリフ、ノートなどの文房具のほかに学生ボタンのレポート用紙、紙ファイルなどを市価よりも安く購入できる。営業時間は9時から14時。休み時間はいつでも利用が可能。

児玉千代江さんは23年間、生徒の笑顔が好きです。パンの購入で働いている。パンの中で一番人気の商品はメロンパン。毎月種類が変わる菓子パンも人気だ。おすすめは焼きそばパン。局員が食べた感想は「食べやすい大きさでおいしい味付だ」。児玉さんは生徒と話したり生徒たちの笑顔を見たりするのが好きなので、新入生にも購買に足を運んでほしいという。また「昼休みは混雑するので3時間目と4時間目の間の休み時間に利用するのがおすすめ」と話した。



「ごみの処分をしている塚田さん

いる」と話した。校務補の塚田さんは「旭工は燃やせるごみとプラスチックごみの量がとても多い。美化委員と先生方がごみ袋の中を見てくれているので、分別

の状況はおおかた問題は無い」と話した。旭工生に向けて「ごみの分別を自分たちで意識して行なっていきたい。ペットボトルや空き缶は中身がきちんと洗われていないものも多く、汚れた物もあるので必ず洗ってほしい」と注意を喚起した。美化委員に対して「ごみがたくさん出ており、ごみ袋の中のチェックをしきれないときがあるので気を付けてほしい」と話した。

被爆者講話

姉ががれきに埋まる

火の手が長崎に広がる

原爆の悲惨さや平和の尊さを訴える活動をしてきた北海道被爆者協会が来年解散する。会員の高齢化で活動が難しくなったためだ。戦争体験者の話を直接聞く機会が少なくなっている。

新聞局では毎年、戦争についての特集を組んでいる。今回は昨年の見学旅行2日目の10月25日、長崎原爆資料館平和学習室での被爆

者・伊藤武治(たけはる)さん(82)の講話を紹介する。

長崎市にアメリカ軍が原子爆弾を投下したのは1945年8月9日午前11時2分。3000度以上の熱線と最大風速440m/sの爆風、放射線が長崎の街を襲った。伊藤さんは爆心地から約3・8kmの長崎市館内町にあった自宅で被爆した。当時4歳。家で鶏を飼っ

ていて、母が餌をやっているところをそばで見ている時だった。爆音が聞こえ、その後「ピカッ、ドーン」ときた。その時の記憶はなぜか抜けている。ガラスが飛んできたのか右目の上が切れて血が出ていた。それから母、松江さんに手をひかれて石段を上り、高台に腰を落着けた。そこからは爆心地付近の浦上方面がよく見えたという。母から「これが最後かもしれないけん、よう見とかんね」と言われ、長崎の街を見ていた。しばらくすると県庁が燃えだし、火の手は裁判所方向にも広がっているようだった。小学2年生くらい



長崎平和祈念像(写真提供:清沢英樹先生)

になりあの時は大変だったんだな、ていた。他の兄弟は祖母の家にいて無事だった。次姉が特に大変だった。母と爆心地付近の浦上方面へ探しに行ったが見つからず、行き違いで家に帰っているかもしれないので引き返した。その夜、玄關で音がして見ると次姉がボロボロの服で立っていて、母は走って駆け付けた。後から聞くと友達と工場から水くみに出ていた時に原爆にあい、がれきの間に埋まってしまったという。数時間「助けて」と声を上げていたら、血みどろになった男の人ががれきをよけて、引っぱり出してくれた。次姉は命は助かったが、週2回くらいアメリカ力

の原爆障害調査委員会の検査を受けていた。三菱重工に勤めていたが57歳の時、喉のがんになり2度手術をした。悪性のがんと言われ手術後に主治医から汚れた空気やたばこの煙を吸うと再発する危険性があると言われ、早めに三菱重工を退職した。それから動いたり語ったりするのは喉に良いと知り、長崎のボランティアガイドになった。

伊藤さんは講話の最後に「今の世界情勢を見ていると核兵器が使われるのも時間の問題だと感じる。戦争をせずにどんな命も大切にしたい」と語った。